

## “丹波望コレクション・ナイト” Vol.48

人生で一度は聴いておきたい名曲選！

チャイコフスキー＋ラフマニノフ特集

今夜もお集まりいただき、ありがとうございます。

しばし日頃の喧騒・心配を離れ、ゆったりとクラシック音楽にこころを委ねてみましょう。

～お飲み物を用意しています ご自由にお楽しみください～



クラシック音楽の夕べ 丹波望コレクション・ナイト

日 時： 2月16日(月) 18時～19時30分

会 場： のしろ交流プラザ Coco Wa (ココワ)

参加無料：皆様からのご寄付を申し受けております！！

※本サロンでは引き続き感染防止対策のため、手指消毒、ディスタンスの保持、マスクの着用など、ご協力の継続をお願いします。

お問い合わせ先

丹波望コレクション・ナイト事務局 080-6651-9634(越後)まで

### 第一部(約36分)

#### ピアノ協奏曲第1番(チャイコフスキー)

第二次世界大戦後のアメリカ合衆国ではこの作品の演奏頻度が急増したと伝えられるが、その要因としてはトスカニーニとホロヴィッツが共演した名盤や、第1回チャイコフスキー国際コンクールで優勝したヴァン・クライバーンの存在が挙げられる。

クライバーンの『ピアノ協奏曲第1番』は、ビルボードのポップアルバムチャートで1位(7週連続)を獲得した唯一のクラシック作品である(2007年現在)という事実からも当時の人気ぶりが窺える。

#### 第1楽章(約22分)

雄大な序奏と変則的なソナタ形式の主部からなる。非常によく知られた序奏はシンフォニックで壮麗であるが、この序奏題は残りの部分では二度と再現されず、協奏曲全体で特異的な位置を占めている。

ソナタ形式の主部は3つの主題を持ち、第1主題はウクライナ民謡のリズムに基づいたものである。

ピアノの華麗な装飾を伴って両主題が確保されると、第3主題から始まる展開部に入り、クライマックスが形成されてゆく。

再現部は第2主題の再現ののちにカデンツァに入る。

カデンツァは第3主題の再現を兼ねており、再び第2主題が現れてカデンツァが終わると、オーケストラで第3主題が奏され、そのまま短いコーダに入って雄大に曲が閉じられる。

#### 第2楽章(約7分)

弦楽器によるピッツィカート伴奏に乗せてフルートが主題を奏するロシア風アンダンテと、フランスの古いシャンソンが元になっているといわれる中間のソロのヴィルトゥオーソ。

#### 第3楽章(約7分)

第1主題はやはりウクライナ民謡に基づいている。第1楽章の序奏主題のテンポが第3楽章のコーダ直前の副主題の再現とほぼ一致するため、演奏家及び聴衆は未曾有の達成感が得られる。

・・・休憩・・・

## 第二部(約35分)

### ピアノ協奏曲第 2 番 (ラフマニノフ)

協奏曲作家としての名声を打ち立てたラフマニノフの出世作である。

発表以来、あらゆる時代を通じて常に最も人気のあるピアノ協奏曲のひとつであり、ロシアのロマン派音楽を代表する曲の一つに数えられている。

多くのラフマニノフのピアノ曲と同じく、ピアノの難曲として知られ、極めて高度な演奏技巧が要求される。たとえば第一楽章冒頭の和音の連打部分において、ピアニストは一度に 10 度の間隔に手を広げることが要求されており、手の小さいピアニストの場合はこの和音塊をアルペッジョにして弾くことが通例となっている。

#### 第 1 楽章(約 11 分)

主題呈示部に先駆けて、ピアノ独奏がロシア正教の鐘を模した、ゆっくりとした和音連打を、クレシェンドし続けながら打ち鳴らす。導入部がついに最高潮に達したところで主部となる。

主部の最初で、オーケストラのトウツティがロシア的な性格の旋律を歌い上げるが、その間ピアノはアルペッジョの伴奏音型を直向きに奏でるにすぎない。この長い第 1 主題の呈示が終わると、急速な音型の移行句が続く、それから変ホ長調の第 2 主題が現れる。第 1 主題がオーケストラに現れるのに対し、より抒情的な第 2 主題は、まずピアノに登場する。

展開部で壮大なクライマックスを迎えると、恰も作品を最初から繰り返そうになるが、再現部はかなり違った趣きとなる。ピアノの伴奏音型を変えて第 1 主題の前半部分が行進曲調で再現された後、後半部分はピアノによって再現される。そして第 2 主題は移行句なしで再現され、入念にコーダを準備する。

#### 第 2 楽章(約 12 分)

盛り上がった第 1 楽章が終わると、それと好対照をなす緩徐楽章が弦楽合奏の pp で神秘的な始まりを告げる。弦楽合奏の序奏は、ハ短調の主和音から、クレシェンドしながら 4 小節でホ長調へ転調しピアノ独奏を呼び入れる。

最初フルートで奏でられたメロディーがクラリネット、ピアノ、ヴァイオリンへと受け継がれていく。

テンポが上がり、ピアノが第 2 主題を思い悩むかのように短調で奏でる。ファゴットや低弦、更にフルートとオーボエなどと絡み、ピアノがメロディーを奏でて 2 回盛り上がる。

その後ピアノソロになりテンポも上がり華やかな分散和音の後オーケストラと絡んで、ピアノのカデンツァへと進む。その後最初の 3 連符 4 個の塊が 3 つのピアノの音型になり、その上に最初のメロディーをヴァイオリンが奏でて再現する。

その後、美しく短い終結部に入る。ここではピアノの右手が和音を波のように揺れて奏で、最後はピアノだけで 2 楽章を優しく静かにまとめる。

#### 第 3 楽章(約 12 分)

主たる楽想は明確な 2 つの対照的な主題を持ちながらも、前楽章で用いられたモチーフを断片的に使ったり、2 つの主題を融合するなど、既存の形式にこだわらない自由な書法で書かれている。

副主題をもつ変奏曲、あるいは変則的なロンドとも解釈することが出来る。

スケルツォ的な気まぐれな性格が認められる第 1 主題と、より抒情的な第 2 主題が交互に現れ、最後のピアノのカデンツァの後にハ長調で全合奏で二つの主題が融合されて盛り上がるシーンは圧巻で、高い演奏効果をもたらす。